
このコンクリートの道に

椿 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このコンクリートの道に

【Nコード】

N3384E

【作者名】

椿 怜

【あらすじ】

中学2年の春、愛しき小学校の通学路。何を探しに来たんだろう
…何かを手に入れたくてやってきた名津のちよっぴり切なくて温かいストーリー

（前書き）

初めて書きました（＜|＞）本当に一生懸命書いたんですが、誤字などありましたらご指摘お願いします！感想ダメ出し等もできればお願いしたいですっ最後までよんであげてください

小学校の卒業式から二回目、中学2年の春の到来。久しぶりの暇な休日。何を思ったか：なぜか私は小学校のときの通学路に来ていた。そよそよと風がかみをなでるこの道には、小さくさりげなく、黄色のタンポポが咲いていた。忙しくて気づかなかったけどもう春なんだ、と改めて実感する。

何を探しにやってきたのか、何をしに来たのか。よくわからないまま私は通学路を歩き出していた。

見慣れた景色はどこか懐かしく、ちょっと胸が痛んだ。なぜなら小学校を卒業してすぐに、私は、親の離婚でこの町をさったからだ。12年間の思い出がここに詰まっているのだ。

『沙紀？』

私の一番の親友だった沙紀をこの坂道の上から何回よんだことだろう。

「沙紀…」

小さくそうつぶやいた瞬間、溢れるばかりの沙紀との思い出がよみがえった。

ある日の小学校の登下校。この坂で。

「今日のクラブちょおつかれたんですけどー」

猫背の沙紀が言った。

「でもバレー楽しくない？」

「んゝまあね」

「私バレー大好き」

「あんた。あいかわらずストレートだなあ。大好きとか言うなつ。こつちが恥ずかしくなるわ」

「ブ」

「ブーと言わないのっ」私は沙紀のこのテンポのいい会話が好きだった。沙紀がいつもつもつこんでくるのがたまらなく好きだった。

沙紀にしかこの笑顔は見せなかった。本当に本当に大好きで、本当に本当に気があって…本当に本当に別れが惜しかった。

「あのねっ沙紀にあげたいものがあるんだ」

「っなっ何」

バックの中をあさって不細工な猫を取り出す。

「ジャーん」

「…ナニソレ」

「手作り猫」

「うっそお？それ猫？どつちかつうーと…ぶ…」

「その先言ったらほんとに怒るよ。サッキッちゃあ〜ん」

「嘘嘘。ちゃんと猫に見えるよ。なに…それくれんの？」

「ふふーあげちゃう」

「ありがとっ」

「でもそいつには秘密があるんだなあ」

「まだなんかあんの？」

「実はね〜ねこが持つてるポシェットの中にね…」

「中に…？」

「やつぱ教えないあい」

「え〜…なんだそれ〜」

「あとで見てよ」

「なにそれ〜？気になる〜」

今だから言っけど。ポシェットの中には沙紀大好きって書かれた紙が入ってたんだよ、沙紀。見てくれた？

きつと沙紀はもうあんな不細工な人形は捨ててしまっただろう。そばにいないければ私のことなど全て忘れてしまっただろうから。そばにいないものことなんてすぐ忘れてしまうのだ。昔飼っていたハムスター、柵をガリガリかんで餌をねだってきたのがかわいかったのに、今はそのガリガリの音さえも思い出す事が出来ないのだから。所詮そんなもんなのだ。私のかわいいはそんなちっぽけな愛情だったんだ。だから…

こうやって頭ではちゃんと理解してるのに私の足が向かった先は沙紀の家だった。入る勇氣は出るはずもなく、玄関の前でただただ立ちすくんでいた。

「みんな〜こつち、こつち」

女の子の高い声が聞こえたので私は反射的に隠れていた。へいの小さい穴からコツソリ声の主を見る。

最も会いたくて、絶対ここで会いたくてない人だった。

沙紀。

沙紀だった。地元の中学生の友達っぽい人とともにいた。家に遊びに来たのか…どこかに遊びに行くのか…どちらにしろ楽しそうに笑う沙紀。私の知らない、私ではない友達。

沙紀は笑っていた。

私がいなくても笑っていた。

そう思った瞬間。自分の居場所はもうここにはないことを知った。悲しい？悔しい？寂しい？そんな簡単な単語ではこの気持ちは表せない。私は一粒の涙をそこにおいて静かに立ち去った。沙紀は沙紀であり、沙紀ではなかった。

通学路に戻った私は沙紀と作った秘密基地に向かった。そこなら…あそこなら、私の居場所があるかもしれない。そう思ったからだ。だが現実はその甘くなかった。小さな沢沿いの桜の木下に作ったはずの秘密基地は跡形もなく消えていた。「私…ばかだ…」木下に座って吐き捨てた。本当にバカだ。バカとしかいいようがない。

新しい中学校にいまいち馴染めなかった私は特定の友達がいなかった。クラスでは適当に冗談も悪口も言って、みんなの輪から外れないよう努力した。できるだけ明るい子に見せようと無理して笑った。でも全然楽しくなかった。居場所はなかった。通学路が愛しくて仕方なかった。沙紀といたあの日々、笑いたくなくても自然にこぼれた笑みが恋しくて恋しくて。

一年たつても、それは変わらなかった。だから今日来たのかもしれない。幸せな時間を探しに…でも…

「そんななんつどこにもない…ここにもない…どこにも…ないっ…」突然涙が溢れ出した。どうすることもできない悲しみに襲われた。もどりたい。あの時間に戻りたい。

この沢で沙紀と沢蟹をさがしたな、秘密基地にタイムカプセルを埋めたな、でもそれって全部過去だ…引きずってんの私だけなんだ。楽しい思い出は所詮、過去でしかない。

泣きじゃくってたら人の気配を感じたので一生懸命涙をふいて知らんぷりをした。チラッと見ると沙紀と中学校軍団たちが道を歩いていた。臆病な私はまた隠れる。

すると、私は幻をみたのだった。

沙紀のバッグに私の不細工猫がついていたのだ。

もう一度目をこすってみてみる。やっぱりある。

深呼吸して見てみる。

やっぱりある。

ある。ある。

沙紀は忘れてなんかいなかった。

ちゃんと覚えててくれたんだ。

「私は本当に本当のバカだ…」

涙を脱ぐって立ち上がった。沙紀たちの背中がどんどん小さくなっていく。

幸せだった日は過去だけど私の誇れる思い出だった。忘れられてしまふことはあってもなくなることはないのだ。私と沙紀は今もこの世に存在して、親友だったという事実もある。

それだけで十分だと感じた。消えてしまいそうなほど小さくなった沙紀の背中にお礼をいってまた歩きだす。「ありがとう」

途中で大通りにでて駅に行く予定だった。しかし、いきなり予定変更。学校に行ってみることにした。なぜかむしろに学校の桜が見たくなつたのだ。私は桜が好きだ。特に学校の。好きになつたのは5年の春だった。

5年の一学期のはじめの日。

「沙紀…違うクラスになっちゃったね…」

「うん…でも遊びに行くからさっ名津（私）元気だして」

「うん…」

うん。と言つたものの新しいクラスに知り合いは一人もいなかった。

お昼の時間も一人だ。他に一人の子もいたけど正直一緒に食べたいとは思わなかった。沙紀以外との給食なんてありえない。

校庭の桜に目をやると満開だった。給食を急いで食べおえ桜の木下の小さなタイヤで一人お花見をやることにした。

タイヤの上は思ったより桜の木に近い。ハラハラの頭の上を舞う桜を見るのは少しむなしい気分になった。

「はあ」

タイヤにねっころがりたくなって横になる。口の中に桜が入ってきた。んなことを気にする元気はなかったけれど、この桜がサクランボだったらいいな…と無謀なことを考えた。そのうちにうつうつしてきた……

「おい？」

誰かの声が夢の中の世界に響く。桜のサクラノボを食べていた夢の中の私にヒビがはいつた。

「わあっ?」

びっくりして飛び起きる。うわ…寝ちゃったよ…ゆっくり顔を持ち上げる…と二度目のびっくり。目の前に男の子がいたのだ。

「うわわわわあ」

タイヤから落ちた。

「いったああ…」

あーカツコ悪い

バカ…

「おっ…何やってんだよ?」

「だって…目の前にいるから驚いて…」

「俺がおこしてやったんだよ。こんなところで昼休みひとりで寝てる同じクラスのやつがいたからさ」

ジロツとにらまれる。でもすぐにニカツと笑い直してくれた。

「同じクラスだっけ?」

「ひでえーな。お前の前のせきだよ。田口名津の前の席」

「うっそお。なんて名前?」

「田口博之」

「うわっ名字かぶってるじゃん」

「しょうがねえじゃん。俺が決めたんじゃないし」

「じゃああんたのことユキって呼ぶ」

「ヒロでよくね?」

「ユキのがいい」

「なんで」

「わたしがナツだから雪と夏」

「くだらねえー」

「くだらなくない」

キンコーンカーンコーン

「…おいつナツ。行くぞ」

ナツと呼んだ彼の声にドキツとした。頭の中でナツつの声がリ繰り返される。「うん」

私より少し大きいくらいの背中なんだから強そうに見えた。

もう分かるだろうが私はユキのことが好きになってしまったのだ。

あとから分かったことだがユキはかなりモテるらしく休み時間も何もかも私が話しかける隙などなかった。当然気持ちも伝えなかった。伝えられなかった。

今あいつはどうしてるんだろう…

考えているうちに学校についた。タイヤの上に2年前と同じ体勢でねっころがったら一粒の涙がこぼれた。

ユキが他の中学校の彼女と歩いてる姿とかしゃべっているとことを想像するだけで泣けるのになんで二文字のただの言葉を言えなかったんだろう…好きだから嫌われるのはそんなにこわいことだったのだろうか…

私って何でこんなに弱いんだろう

自分に絶望だし、桜の花びらは口の中に入ってくる。そのとたん睡魔に襲われた。吸い込まれるよう夢の中へ…

「ユキ…好きです?」

「ごめん…俺彼女いるんだ。おいつサクラ」

「初めましてユキの彼女のサクラ・ンボです」

「さっサクラさん…?そんな、」

「ごめんな、でも俺サクラのこと好…」

私はその先の言葉を聞きたくなくて夢中で走る。ユキが私の名前をよんでいる。

「ナツっ…おいつナツ???」

「はわっ?」

どうやらまたまた寝たらしい。じゃあサクラ・ンボさんは夢かあ…よかった。ほつとしてため息をしてから顔をあげた。

目の前に見えたのはユキだった。

「…ゆ…ゆ…き…?」

目の前に見えているユキは言った。おう、久しぶり

「嘘だ…きつとまだ夢見てるんだ。ユキがいるわけないじゃん。落ち着け自分」

「…お前なにいつてんの?ほんとに本当のユキですが…」

目の前の人物はユキだった。嘘のようだがほんとの話だ。ぎこちなく言う。

「ひっ久しぶり」

「お前さ」

「何?」

「俺さあお前が転校するなんてきいてねえよ」

「…だって…言ってないもん」

「言えよ」

「なんで?」

「なんでも」

「転校しました」

「おせえーよ」

「まっいいや」

「そだよ。もうしょうがないし…」

自分でいったしょうがないの一言が胸にささった。しょーがない…か…。

久しぶりにみたユキは背がのびてますますかっよかった。でも私は出来るだけ見ない。これ以上好きになったら取り返しがつかなくなってしまうから。

「でっとうよ。学校は？」「へ？」

「へっじゃねえーよ。質問に答えろ」

「あっうん…それなり」

「ふうーん」

あんま楽しそうな顔してねえな」

「そうかな」

「うん。二年前さ、ここでお前にあったときもそんな顔してた。」

「…実はさ」

私は転校してからのことを全て話した。友達のこと部活のこと。ユキは真剣な顔で聞いてくれた。親身に相談にのってくれた。

「俺もさ。重度のひとみしりなんさ」

「えっユキが？」

「うん。だからさお前と俺にってるんだよ。あの日声かけたのはさ、俺と同じ顔してたお前にちよっと同情したからなんさ」

意外な真実。あの人気者のユキが人見知りなんて全然思わなかった。

「でも…人見知りは人見知りなりにやれることってあるじゃん？」

「うん」

「だからさ、自分の出来る限りのことをして。それでも友達ができなかったらそれも自分だし、一生懸命がんばった結果だからいっかなあって思っただんだよ。そりゃあ人見知りの自分なんて好きにはな

れないだらうけど、でもさ」

ユキがいきなり白い歯をだしてこっちを向いた。少し焼けてる肌が赤みをましてニカツと笑った。その赤みを隠すように桜の花びらがユキの前を落ちていく。

「自分は自分だし。友達がない自分も。カッコ悪い自分も。イケテナイ俺も。みんな愛すべき自分の姿だから、そのままでもいいだと思っ」

「…」

「ナツはそのままでもいいんだよ」

なぜか雪の一言が今まで無理して、笑って、疲れて、寄り添う術も持たず、心の隅の小さな部屋で泣いていた私に届いた。

『そのままでもいいんだよ』心にしてみた。
涙。

泣いたらくずれそうだったから泣いてた自分は心の隅に封じ込めた。でも今それはユキによって解き放たれた。

「ユキ…っ私…っ」

「よくがんばった」

彼の言葉があまりにも温かくてその場に崩れるようにして泣いてしまった。ユキは何も言わずに黙って側にいてくれた。

どのくらい泣いていたろう。あたりはすっかりオレンジ色に染まっていた。

「ユキありがとう」

「どういたしまして」

もうきつと会うことはないだろう。きつと。ないのだ。私がこんなに好きになった人。内面からあふれる優しさがまぶしい男の子。言うなら今しかない。

「ユキ」

「はい」

「あのさ」

「うん」

「知ってるでしょ」

「何が？」

「とぼけてないでね？」

「」

「私が…」

ユキが子供っぽく笑う。

「俺のこと好きなこと？」「さらっと言わないでよ」私のほうが赤らむ。意味深な笑顔の彼はこう言った。

今度ここで会うときは

自分への自信でみちあふれた顔でこい？

「答えになってないよ」

「それが出来るようになるまでおわずけだよ」

ユキに別れを告げて、駅までの道をゆっくり歩いていく。私の大切な通学路だ。今度コンクリートのこの道を歩くときが来たら、とびつきの笑顔で春に元気をあたえて、道にさくタンポポにおはようと前向きな言葉をかけるんだ。

ブルブル携帯がなる。クラスメートからだ。

『今度クラスの女子でカラオケいくんだあ（＾ｖ＾）よかったらナツもきてよ』

はあ、ため息をして空をみた。辺りは暗いはずなのに来たときよりも明るく感じた。

春の夜風が髪をなでる。
風に約束しよう。

またこの道を歩くときは君をきるようなスピードで走るから。
希望に溢れた顔で走るから。

希望を

走りながら

ふりまくよ

このコンクリートの道に

終わり

（後書き）

本当に下手ですが…

頑張ったつもりです！もし、興味があつた方はコメントお願いします！次回作もよんでやってください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384e/>

このコンクリートの道に

2011年1月25日23時31分発行